

誰が「読者」を殺すのか

1. 「出版不況」概観

出版業界は近年、戦後未曾有の大不況にみまわれている。その現状をまず具体的なデータを示しながら概観してみたい。『出版年鑑』2002年度版の「出版点数と出版実売総金額推移」を見ると、出版界は96年以降5年連続のマイナス成長を記録した。その一方1年間に発行される書籍の点数は00年～01年にかけて急激に増加した。01年の新刊点数は71、073点（前年度比9.2%増）で、単純計算をすると一日に約195冊の書籍が刊行されていることになる。新刊発行点数は増加しているものの、返品率も増加している。『出版データブック』によれば、2000年度の書籍、雑誌返品率はそれぞれ39.2%、29.1%。新しい書籍は次々と生まれるものの、返品されて店頭から消えてしまうスピードもそれだけ速く、読者はもはや加速度化される書籍流通に追いつけない状態になっていると言える。

日本経済のバブル崩壊は90年代初頭であるが、出版界はその影響を被ることなく、成長を続けていた（「出版は不況に強い」神話）。しかし96年を境にかけりが見えはじめる。98年の中央公論社買収、00年の駿々堂（京都の老舗書店）自己破産、01年の鈴木書店倒産などに代表されるように、安定していると思われてきた出版界の地盤が揺らぎだしたのである。それまで出版業界で廃業と言えれば流通の末端、つまり街の小さな書店が店をたたむという程度のものであったのが、今や廃業・倒産の波は出版社、取次、（大型）書店にまで及んでいる。

本年度講演を依頼した小田光雄は『出版社と書店はいかにして消えていくか』(注1)などの著作において、現在の出版不況の原因を出版界全体の構造的な欠陥にあるとし、出版社、取次、書店という「近代出版流通システム」自体を変えなければならぬと主張している。とりわけこのシステムの根幹とも言える委託配本制と再販制の撤廃を強く訴えている。次章ではこの2つの制度について見てみることにするが、その前に、出版不況を招来した外的原因と思われるものをいくつか挙げておこう。

- ・ 雑誌、マンガの売り上げ減：2001年度の雑誌売り上げは前年度比3.7%のマイナス。マンガは6年連続のマイナス成長。
- ・ 活字メディアに競合する他メディアの伸張：インターネット、携帯、ゲーム等。（『出版年鑑』の「大学生の読書調査」などを参照）

- ・ BOOK OFF 他新古書店の登場（小田『ブックオフと出版業界』（ばる出版）を参照）
- ・ コンビニエンスストアでの書籍売り上げの膨張：96年時点で出版業界の全売り上げのうち20%、雑誌全売り上げの33%を占める
- ・ オンライン書店：00年7月、日本最大のオンライン書店bk1スタート、00年11月米大手オンライン書店アマゾン・ドット・コム日本上陸

（中沢）

2．委託配本制、再販制度をめぐる諸問題

● 委託配本制について

委託配本制は、後述する再販制とは異なり法律によるものではなく、取引の一形態である。出版業界における「委託制」とは、「返品条件付き買い切り制」とも言い換えられ、書店は取次から入荷した品物の代金を一旦支払うが、その後定められた期間内に返品すればその分の代金が返金されるという取引形態のことを指す。完全買い切り制（返品できない）をとっているのは岩波書店などわずかで、基本的に新刊書および雑誌は返品可能である。

現在出版社は全国に4千数百社あり（そのうち3千数百社が東京に集中している）、新刊書店は2万数千店を数える。これら出版社と書店の仲立ちとなって書籍流通を担っているのが、取次と呼ばれる中間業者である。約70社あり、トーハン、日販の二大取次がシェアの大部分を占めている。取次業者は、出版社から委託扱いで卸された出版物を仕入れ、取引先の各書店へと委託扱いで販売する。書店は、独自の判断で選んだものを取次から買う場合もあるが、取次からパターン配本（出版物の種類、部数や配本先の各書店の規模、立地等を総合的に考慮した上で予め定められている方式に従って配本すること）されてきた商品をそのまま店頭で並べるケースが多い。「新刊洪水」とも言われるほどの状況にある近年では、毎日配本されてくる大量の書籍を書店側が処理し切れず、短期的な利益の望める書籍のみを在庫として確保し、売れる見込みのないものを返品してしまうため、書店の集本能力の低下、書店の「金太郎飴」化（注2）が問題になっている。

委託配本制（返品条件付き買い切り制）という取引形態のもとで、小売り業である書店は返品期限内（商品の種類によりその期間はさまざま）であれば自由に返品でき、代金を受け取ることができる。つまり、仕入れに対するリスクが小さくて済むことになる。また出版社は、取次を通して書店から返品されてきた商品が増加すればするほどその管理維持にかかる費用が経営を圧迫するため、質を低下させても刊行点数を増やして利益を上げなければならない。委託配本制のもと

では取次は刊行物を原則としてほぼ全て買い取り、代金を出版社に支払うシステムになっているので、刊行点数を増やせば少なくとも短期的には利益を上げることができるわけだ。委託配本制は、書店が返品攻勢を繰り返し、出版社が新刊攻勢を繰り返す、というこの悪循環を生み出す要因となっている。そしてこの悪循環を断ち切れぬまま「新刊洪水」と「書店の金太郎飴化」はますます加速している。

小田光雄は、前述した『出版社と書店はいかにして消えていくか』において、現在の書籍流通システムをその起源まで遡って歴史的に検証した上で、その誕生からほとんど変化せずに現在にまで至っている「近代出版流通システム」が制度疲労を起こしていると述べている。「近代出版流通システム」の根幹である委託配本制と再販制を廃止し、出版業界は「現代出版流通システム」へと移行すべきである、と小田は主張している。

< 展望 >

これまで委託配本制の仕組みとその問題点についておおまかに述べてきたが、未曾有の危機への出版業界の対応—それは刊行点数と返品増加という問題の先送りに過ぎないのだが—と業界危機をめぐる言説の中で忘れられているものがあると私は考える。つまり実際に書籍を手に取り、購入し、読む主体としての「読者」の問題が完全に置き去りにされているのではないか、ということだ。もちろん、業界内部で読者の問題が全く考えられてこなかったわけではない。出版業界にはマーケティングが存在せず「どんぶり勘定」で初版部数を決めている、といった批判は以前から存在したし、佐野眞一も『だれが「本」を殺すのか』刊行後のインタビューの中で「本を殺しているのは読者かも知れない」と読者の問題を考える必要性を伺わせる発言をしている。(注3) 小田光雄もまた、70年代に書物が文化財から消費財へと変化したことに伴って読者も消費者化したと述べている。70年代に明治以来の「近代」が終わり、「現代」へと時代が移行する中で、「近代読者」も「現代読者」へ移行した、というわけだ。(注4) しかし、佐野にしても小田にしても「読者」や「読書」というものをあまりにも一義的に、単純化して捉えてしまっているように私には思われる。

アナール派歴史学者ロジェ・シャルチエらの、アンシャン・レジーム下フランスにおける書籍流通と読者、読書に関する研究は、現在の書物、読者、読書の問題を考える際にも非常に有効であると思われる。シャルチエは、『読書の文化史』の中で次のように述べている。

「読むという行為は、たんに抽象的な知的行為なのではない。それは、身体を用いる行為であって、空間のうちに印づけられており、自己あるいは他者との関係のなかにおかれている。」(注5)

そもそも「読書」(単に活字を追う行為のみを指すのではなく、書物を眺める、手に取る、開く、購入する、など書物に関わる具体的な行為の総体)とは、非常に多くの変動要因に左右される極めて把握困難な行為である。「読者の顔」は、個々人の置かれた歴史的・社会的諸条件に応じて変貌するのだ。今日の出版大不況下で読者や読書、書物の問題を考えることの必要性は既に述べたが、そこで戦わされるべき議論は、「最近の学生は本を読まなくなった」「本を殺しているのは読者である」式のものではもはや立ちゆかないところまで来ている。そのような言説は、歴史的・社会的諸条件を捨象した均一で抽象的な「読者」「読書」概念を前提にしている限りで、そこからこぼれ落ちて余りある要素に対する配慮を全く欠いているからだ。雑誌『ダ・ヴィンチ』の実践が端的に示しているように、まさに既成の「読者」「読書」概念からこぼれ落ちてしまう部分を積極的に掬いあげることこそが出版再生のカギとなる可能性を秘めているかも知れないのである。

本年度講演を依頼した日本近代文学研究者の和田敦彦は、メディアや出版流通、読者、読書といった視点から近代文学を問い直すとともに、これまで様々な領域で論じられてきた読者論、読書論相互の比較検討を通して読者や読書の問題に新たな地平を切り開く試みを続けている。著書『メディアの中の読者』において、和田は次のように問題提起している。

「均質な読者や一般的な読書の場を前提とすることによってはじめて、印刷された文字は一般性や普遍性を身に帯びた言葉として機能し始める。しかしそのような「読者」や「読書」の場がどこにあるのだろうか。自明なものとして用いられてきた用語である「読者」や「読書の場」を積極的に問題化し、その歴史的な差異を明らかにしてゆく試みがどのように展開しているのか、そしてそうした問いにはどのような可能性がはらまれているのか・・・」(注6)

本年度の講演会は、ある問いを立てることから始まる。それにしてもいったい誰が「読者」なのか?と。この問いに対して、性急に答えを出そうとするのではなく、講演者、主催者、参加者がそれぞれの立場から意見を出し合い、議論を深めること。本年度講演会の目的はそこにあるように思われる。

(中沢)

● 再販制度について

出版業界などを中心に長らく議論されてきた「再販制度」をここでは取り上げる。再販制度が話題になったのは、昨年(2019年)の3月に公正取引委員会がこの制度の存廃の結論が出されるということ

で、新聞各紙および出版社、そして著述家の間で盛んに再販制度の維持を訴えるキャンペーンが張られてからのことだろう。しかし、再販制度という仕組みそのものの複雑さ、そしてなにより「再販維持」一辺倒のマスコミの論調により、その全容を把握することは非常に困難となっている。そこでまず、再販制度の歴史的な背景、法律的な位置づけを概観したい。

再販制度とは正式名称を「再販売価格維持制度」と言い、製造業者や輸入業者などの供給業者が、その販売する商品について、卸売業者や小売業者などの販売業者に販売し、その販売業者はさらにそれを次の段階に再販売する際の価格（再販売価格）を指示し維持するための諸行為を指し、独占禁止法における例外的な事例とされている。(注7)そもそもは中小の小売業者の利益を保護するために19世紀の後半からヨーロッパ諸国で行われるようになった制度で、日本においては戦後まもなく導入され、石鹸や歯磨きなどの日用品、薬や化粧品などにも適用されていた。現在この制度が適用されるのは、著作物と呼ばれる一連の商品（本・雑誌・CD・ビデオテープなど）のみである。

2002年3月、公正取引委員会は再販制度に関して次のような結論をくだした。「再販制度は競争政策の観点からは廃止すべきと考えるが、廃止には国民的合意が形成されるに至っていない状況にあり、当面制度を存置することが相当。」この結論に至るまでの議論は、大まかにまとめると、競争政策を優先させるか、文化政策を優先させるか、という点に集約される。言うまでも無く、競争政策を優先させるとしたら再販制は破棄されなくてはならない。しかしそれと同時に、著作物は単なる商品ではなく、著作者の文化的な生産物であり、知的な文化の公共物でもあり、万人に広く行き渡るべきものとして存在するのである。換言するならば、著作物は消費財か文化財か、ということである。

今回講演を依頼した永江朗や小田光雄は、この再販制を現在の出版流通の機能不全を引き起こす要因として捉え、その廃止を訴えている。

< 永江の批判点 >

永江は再販制と委託配本制が出版業界全体を自転車操業の状態に追い込んでいると指摘する(注8)。再販制によって小売価格は固定化され、また委託配本制によって書籍は、いつでも現金化できる有価証券のようなものになってしまう。出版社は売れようと売れまいと、書籍を作ることによって当面のお金を得ることが出来るし、書店も本を返品さえすれば同様にお金を得ることが出来る。つまり再販制と委託制の結果、出版社は無責任に本を作り、取次ぎは無責任に配本し、書店は無責任に返品する。この三者の間で、書籍は現金と同様の価値を持つものとして流通するようになる。この流れと止めることは、その時点で出版社なり書店の資金繰りが破綻することを意

味し、それゆえに誰もがこの流れを止めることが出来ないでいるのである。そしてその結果、出版業界は「新刊洪水」と呼ばれるドロ沼状態に陥ってしまったのである。

< 展望 >

もっとも、このような硬直した業界の状況を(打ち破るとはいかないまでも)すり抜けるような、様々な試みも一部ではなされている。例えば電子出版などはこれから先さらに注目を集める存在となるだろう。高速回線の普及により、デジタルコンテンツを以前よりもはるかに容易に自宅で手にすることが出来るようになり、また様々な機器によってより読み易く表示されるようになってきている。遠くない将来に、ますます電子書籍のシェアは増大することになるのではないだろうか。ここで述べる電子書籍とは、単純にダウンロード販売されるような特定のファイル形式の電子書籍のみを指しているのではない。現在ウェブ上には無数のテキストサイトが存在する。その中には一日のアクセス数が数千、数万におよぶものも存在する。ウェブ上で公開されたテキストが評判となり、そのまま書籍の出版に向かうというケースも少なくないのである。そして、そのような状況でクローズアップされるのは、著者と読者の距離や関係の柔軟性だ。著者はより簡単に自分の著作を読者に届けることが出来るようになるし、またその形態も自由に選べる事が出来るようになる。こうした、著者と読者の接近(注9)が出版業界にどのような変化をもたらすのかは、残念ながらまだ分からない。しかし、遠くない将来には私たちが手にする本という形式、あるいは「読書」という形式そのものに何がしかの変化がおきるのではないか、そんな状況に私たちはいるのである。

(森原)

3.置き去りにされた読者・読書をめぐって

さて、本稿では出版と流通をめぐる問題を概観してきた。これらの論点は、大ベストセラーとなった佐野真一の『だれが「本」を殺すのか』にもカバーされている。ブックガイドでも示しているが、確かにこの本は出版流通の問題を網羅的に紹介しているという点では労作であるし、重要な著作でもある。しかしその分析には首をかしげてしまうことも多い。その原因の一つには、佐野自身が教養主義、良書主義を否定するポーズを見せながらも、完全にはそれを捨て切れていない点にあると思う。このことは、彼の雑誌『ダ・ヴィンチ』に対する評価に表れている。彼は同誌を「消費財としての本の洪水という状況をまるきり手ばなしのまま商品化した書評誌」である、と評価している。しかし、今出版業界が活路を見出すとしたら、このような消費財としての書物を受容する層をいかに拾い上げ、取り込んでいくかにかかっているのではないだろうか。先ほど私は、再販制度にまつわる議論が「著作物は消費財か文化財か」という点を中心に行われて

いるとした。言うまでも無いことだが、資本主義社会において文化というものはことごとく商品化、物化されるのであり、この現状を否定することはできない。そういった状況において、著作物のみが商品化を免れうる存在として特権化されるような状況は考え難い。もしこの先、著作物の商品化がますます進み、そのことによって読書の可能性が失われるようなことがあるとしたら、つまり読者の感性が市場によって支配され、読書という商品の受容方法すらワンパターンになってしまったとしたら、それは出版業界が自分自身の首を絞めているということに他ならない。読者を「置き去り」にしないためにも出版業界は企業努力をすべきであるし、もちろん読書をする人間も、「置き去り」にされないよう「賢い消費者」にならなくてはならない。しかし、そもその前提である「著作物の商品化」という事実を隠蔽した上での議論はもはや意味をなさないといえよう。最後に、今回講演会にお呼びする永江朗の発言を引いて、本稿の結語に代えたい。

(佐野との対談において『ダ・ヴィンチ』を評して)「ああいう形(モックンが幸田露伴や寺田寅彦を推薦している)で紹介することによって、寺田寅彦なんて見向きもしなかった子が手に取ってみる可能性が生まれる。その瞬間を作り得ているだけでも、あの雑誌の存在意義はあるだろうと思います。」(注10)

(森原)

2002年度講演会 準備のためのブックガイド

< 講演者プロフィール、著作 >

永江朗(ながえ・あきら)

1958年生まれ。北海道出身。法政大学文学部哲学科卒。約7年間洋書輸入販売会社に勤めた後、フリーの編集者兼ライターに。編集者時代には『宝島』『別冊宝島』を担当。現在はライター業に専念。

著作：

『ブンガクだ J!—不良のための小説案内』(イーハトーヴ、1999)

『菊地君の本屋』(アルメディア、1999)

『批評の事情—不良のための論壇案内』(原書房、2001)

『超激辛爆笑鼎談・「出版」に未来はあるか?—中央公論買収の裏側、三一書房ロックアウトの真相』(安原顯、井家上隆幸と共著、編書房、1999)

- 『出版クラッシュ!?—書店・出版社・取次 崩壊か再生か 超激震鼎談・出版に未来はあるか? 2 』
(小田光雄、安藤哲也と共著、編書房、2000)
『不良のための読書術』(ちくま文庫、2001)
『アダルト系』(ちくま文庫、2001)
『消える本、残る本』(編書房、2001)
『インタビュー術!』(講談社現代新書、2002←最新刊)

関連サイト:「甘い本辛い本 永江朗×齋藤美奈子」オンライン書店 bk 1 での連載対談
http://www.bk1.co.jp/cgi-bin/srch/srch_top.cgi/3a7415763554e0103197?aid=m&tpl=dir/01/01110000_0007_bn.tpl

小田光雄(おだ・みつお)

1951年生まれ。静岡県出身。早稲田大学文学部卒。書店経営、ロードサイドビジネス、土地活用業務などを経て、現在出版社の経営に携わる。

著作:

- 『「郊外」の誕生と死』(青弓社、1997)
『船戸与一と叛史のクロニクル』(青弓社、1997) 『出版社と書店はいかにして消えていくか 近代出版流通システムの終焉』(ぱる出版、1999)
『ブックオフと出版業界 ブックオフ・ビジネスの実像』(ぱる出版、2000)
『図書館逍遥』(編書房、2001)
『古本屋サバイバル—超激震鼎談・出版に未来はあるか? 3』(編書房、2001)

関連サイト:編書房HP
<http://www2u.biglobe.ne.jp/~k-kuni/>

和田敦彦(わだ・あつひこ)

1965年生まれ。高知県出身。早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程単位取得退学。博士(文学)。信州大学人文学部助教授。

著作:

- 『読むということ—テキストと読書の理論から—』(ひつじ書房、1997)
『読書論・読者論の地平 日本文学研究論文集成(47)』(若草書房、1999)
『メディアの中の読者 読書論の現在』(ひつじ書房、2002)

他論文多数。

ホームページ：信州大学人文学部和田敦彦研究室（既発表論文が読める）

<http://fan.shinshu-u.ac.jp/~wada/index.html>

関連サイト：ひつじ書房HP

<http://www.hituzi.co.jp/>

（中沢）

< 教養論を巡るブックガイド（と、教養をめぐる個人的見解） >

初対面の人としゃべるとき、年齢の離れた人としゃべるとき、われわれは同年代の友人としゃべるときの何倍もの労力を費やす（はずである、多くの人は）。それはなぜかといえば、共有でき得る話題、お互いが前提としているであろう知識、そういった様々な要素を探りながらコミュニケーションを行わなくてはならないからである。かつて、学生なら誰もがサルトルやマルクスを読み、その知識を背景として誰もが議論に明け暮れていた時代があったという。そういった状況において、サルトルやマルクスを読むことは、あくまで前提となる知識を共有し、議論のスタートラインに立つための手段であったのだろう。そして、この対話を始めるにあたっての前提条件こそが、まさに「教養」と呼ばれるものである。例えば音楽について教養がある人とは、単に音楽についての知識が深いだけでなく、音楽に関する様々な話題を提供し、また他の人と共有できる人のことを指す。これと同様に映画にも漫画にも、そしてもちろん哲学や文学にも、対話を始めるにあたって前提となる「教養」は存在する。例えば、大塚英志によるアニメやマンガの歴史化作業や、呉智英、浅羽通明などによる「教養論」の試みなどは、こういった「教養」の存在を改めて可視化し、下の世代に伝えようとする啓蒙的な動きだと理解できるだろう。

しかし、それでは同じ「教養」を有していない人間とは何らコミュニケーションを取ることが出来ないのかということ、もちろんそんなことはない。「人は、現実生活の中で、無意識の内に自分とは異質な異文化—即ち"他者"との接点を見出そうとしているもの」(注11)だからである。現代の教養論は、何をもって教養とするのかだけではなく、その先の地点、即ち誰に、どのように伝えるのか、そういったレベルまで思考を進めなくてはいけない段階にあるのだ。

さて、話を今回の講演会のテーマへと進めよう。今回の講演会を企画するにあたって、何度か「読者」の問題というものを指摘してきた。出版不況が進行する中、その先に待ち受けているものは「読者」の消滅であり、「読者」の消滅とはそれまで活字メディアが形成してきた「文化的公共圏」が崩壊することでもある。それにもかかわらず、なぜこれまで多くの出版業界本は「読者」

の問題をきちんと取り扱ってこなかったのだろうか。その疑問が、今回の講演会を企画した一つの理由である。そしてこの出版不況という問題に対して単なる分析を行うだけではなく、遠回りかもしれないが、ある種の解決策を提示しようとしているのが一連の「教養論」であり、その意味で非常に興味深くもあり重要でもあるのだ。

- ・橋本治『天使のウィンク』(中央公論新社、2000)
- ・橋本治『[増補]浮上せよと活字は言う』(平凡社ライブラリー、2002)
- ・大塚英志・ササキバラゴウ『教養としての<まんが・アニメ>』(講談社現代新書、2001)
- ・浅羽通明『教養論ノート』(幻冬社、2000)
- ・浅羽通明『大学講義 野望としての教養』(時事通信社、2000)

(森原)

< 読書論・読者論に関するブックガイド >

既に述べてきたように書物や読書、読者をめぐる問題は、その性格ゆえに多様な領域から論じられる可能性を持ち、また論じられてきた。和田敦彦『メディアの中の読者』第1・2章では、書物・読書・読者の問題がこれまでどのような領域でどのように論じられてきたのかが整理され、諸領域同士が対話的に関わり合っていくことに今後の読書論・読者論の可能性が見いだされている。

「(読書、読者に対する)歴史的なアプローチや、書かれたこと、読まれたことの一回性、個別性を重視するアプローチと、より普遍的な、読みのプロセスの一般モデルやそこに作用する諸要因のモデルを構築したり、あるいはそれを発達過程の中に位置づけてゆくアプローチ。ここで強調したいのは、こうしたアプローチの違いについて考えること自体が、読書論の可能性の地平なのだということだ。」

『メディアの中の読者』には注が豊富に付いており、優れたブックガイドになっている。そしてこの注付けの方針自体が『メディアの中の読者』という書物の読者と対話的に関わろうとする和田の出版戦略を表している(「注は学術書の体裁のためではなくて、読者のためにこそある。」「あとがき」)。

永江朗『不良のための読書術』は、「かくあるべき読書・読者」を説く読書指南本とはだいぶ異なる。「新刊洪水」「書店の金太郎飴化」の中でどのような読書をすればよいのか、そのヒントが語られる。そこで提示されるのは、「不良」という新たな読者像である。「良い子」になってしまわないために本を読んで「不良」になろうと説く永江もまた、出版業界をめぐる問題、読書、読者の問題に書き手として自覚的にコミットしていると言えるだろう。

その他関連本：

□以下に挙げる書籍は本年度講演会に関連する（と個人的に判断した）ものである。主に文学研究において引用されることの多い文献であり、領域も文学理論、哲学、社会学、歴史学、メディア論などに限定されている。更に詳細な文献リストは承前『メディアの中の読者』の注を参照のこと。なお□印は品切れ、絶版書籍。

- ・ 『別冊・本とコンピュータ□ 人はなぜ、本を読まなくなったのか？』（トランスアート）
- ・ G・P・ランドウ『ハイパーテキスト』（ジャストシステム）
- ・ D・ポルター『ライティングスペース』（産業図書）
- ・ P・ヴィリリオ『速度と政治』（平凡社ライブラリー） ・ 石原・小森ほか『読むための理論』（世織書房）
- ・ テリー・イーグルトン『文学とは何か』（岩波書店）
- ・ H・R・ヤウス『挑発としての文学史』（岩波現代文庫）
- ヴォルフガング・イーザー『行為としての読書』（岩波書店）
- スタンリー・フィッシュ『このクラスにテキストはありますか』（みすず書房）
- ・ M・フーコー『作者とは何か？』（哲学書房）
- ・ M・フーコー『幻想の図書館』（→『ミシェル・フーコー思考集成□』筑摩書房、に収録）
- ・ R・バルト『物語の構造分析』（みすず書房） ・ 前田愛『近代読者の成立』（岩波現代文庫）
- ・ 外山滋比古『近代読者論』（みすず書房）
- 山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局） ・ リュシアン・フェーヴル、アンリ＝ジャン・マルタン『書物の出現 上下』（ちくま学芸文庫）
- ロジェ・シャルチエ『読書の文化史』（新曜社）
- ロジェ・シャルチエ『書物の秩序』（ちくま学芸文庫）
- ・ ロジェ・シャルチエ『書物から読書へ』（みすず書房）
- ・ ロジェ・シャルチエ『読書と読者 アンシャンレジーム期フランスにおける』
- ・ ロジェ・シャルチエ『フランス革命の文化的起源』（岩波モダンクラシックス）
- ・ ピエール・ブルデュー『芸術の規則□□』（藤原書店）
- ・ ピエール・ブルデュ『実践感覚□□』（みすず書房）
- ・ 紅野謙介『書物の近代』（ちくま学芸文庫）
- ・ 山本芳明『文学者はつくられる』（ひつじ書房）

- ・ 永嶺重敏『モダン都市の読書空間』(日本エディタースクール出版部)
- 佐藤健二『読書空間の近代』(弘文堂)
- ・ 宮下志朗他編『書物の言語態』(東京大学出版会)

雑誌：

- ・ 「ダ・ヴィンチ」
- ・ 「本の雑誌」
- ・ 「図書館の学校」
- ・ 「recoreco」
- ・ 「編集会議」
- ・ 「東京人」(神保町特集など)
- ・ 「AMUSE」(古本特集など)
- ・ 「重力」
- ・ 「早稲田文学」
- ・ 「新現実」
- ・ 「國文學 解釈と教材の研究」

など。

注1 小田光雄『出版社と書店はいかにして消えていくか 近代出版流通システムの終焉』(ぱる出版、1999)

注2 永江朗『不良のための読書術』(ちくま文庫、2001)

注3 佐野眞一『だれが「本」を殺すのか PART-2 延長戦』(プレジデント社、2002)

注4 『出版社と書店はいかにして消えていくか』

注5 ロジェ・シャルチエ『読書の文化史 テクスト・書物・読解』(福井憲彦訳、新曜社、1992)

注6 和田敦彦『メディアの中の読者 読書論の現在』(ひつじ書房、2002)

注7 伊従寛編『著作物再販制と消費者』(岩波書店、2000)

注8 井家上隆幸、永江朗、安原顕『超激辛爆笑鼎談・「出版」に未来はあるか?』(編書房、1999)

注9 例えば、村上龍は自身の著書『共生虫』を、単行本の出版に先駆けてオンデマンド(受注販売)で発売した。ライトノベルズで人気を博している村山由佳は、出版社のサイトに掲載さ

れた原稿を基に単行本を発売している。またフランス文学・哲学研究者の内田樹は、自身のウェブサイトに掲載した評論などがきっかけとなって単行本を発売、現在でもウェブ上での原稿と書籍の発表を平行しながら、多彩な執筆活動を行っている。

注 10 『だれが「本」を殺すのか PART-2 延長戦』

注 11 橋本治 『[増補] 浮上せよと活字は言う』(平凡社ライブラリー、2002)